



①器を作る松本幸介さん（手前）＝東京都新宿区
②河合塾コスモの「自由広場」に集う生徒たち一名古屋市中村区、吉本美奈子撮影

いま No.1402 子どもたちは 学校じゃないから①

笑顔でいられる進路へ

ぐるぐる回る電動ろくろに置かれた粘土の塊が、しだいに筒のような姿に変わっていく。添えられた両手の繊細な動き、微妙な力加減が、塊に様々な個性を与える。東京都内に住む松本幸介さん(19)は、そこに魅力を感じるといふ。「受験勉強は嫌い。だけど、陶芸を学ぶのは苦

にならない」

昨年5月、大手予備校河合塾の高校中退者向けコース「COSMO」に入塾した。都立の進学校を中退して約1年後のことだ。東京と名古屋に校舎があり、高校中退者のほか、不登校や引きこもり経験者ら計約320人が通う(2月28日現在)。

コスモには、いわゆる受験勉強以外に、街歩きや合唱、陶芸などを指導するゼミもある。好奇心を刺激し、将来やりたいことを見つけるきっかけの場だといふ。

松本さんは高校2年のとき、学校に行けなくなった。特に何か嫌なことがあったわけではない。「成績が伸びず、受験勉強のストレスがたまっていた。完璧さを求めることが自分を追い詰めた」と振り返る。

高校卒業、大学進学、就職……他人にも自分にも、普通だと映っていた道を歩みづらくなった。「独り立ちできるよ」と育ててくれた親には申し訳ないな」と感じた。気分が沈み、食欲もなく、昼夜が逆転した生活を送った。毛針を手作りし、月に1度は出かけていた大好きな魚釣りにも行かず、部屋にこもりがちになっていた。少しづつ落ち着いてきたころ、親に「これからどうする?」と聞かれた。「勉強しない

といけない」と考えた松本さんは、退学する前に高校の担任から聞いたコスモのことを思い出した。

好きな魚に関係することが学べる大学に行こうと自分に言い聞かせて入塾したが、「二方向的にやらされる」受験勉強には身が入らなかった。コスモも休みがちになったころ、塾に通う習慣をつけるためにゼミに参加することを勧められた。そこで、陶芸に出会った。

高校中退者にチャンス

河合塾コスモは設立30年。1988年に名古屋校、89年に東京校がそれぞれ開校した。当時は中退者が年間10万人を超え、社会問題に。河合塾の名物講師の故牧野剛さんと、コスモで陶芸ゼミを担当する西城さんらが中心になって立ち上げた。

設立当時から河合塾で日本史講師を務める玉上善彦さん(66)は「うちの当時の大学進学熱を過熱させる側だった」と話す。偏差値教育に関わることに、じくじたる思いがあったという。

コスモでは「自由」「自主」「自律」を重視。西城さんは「予備校だからこそ、高校をやめた人たちがチャンスをつかむ

した陶芸の専攻科。陶芸を基礎から学ぶことができ、産地などの有名な陶芸家のギャラリーや美術館があったからだ。高卒認定試験のために、苦手だった受験勉強にも向き合った。

4月からは専攻科に通うため、東京の実家を離れて岐阜県に一人暮らし。高校を中退したときには、思ってもみなかった自分の姿だ。だが後悔はない。「陶芸の道を追えば、笑っている自分が想像できたから」。大学に進学した高校時代の友人からも「やりたいことが決まっていればいいよ」と言われている。

(増田勇介)

講師の中には、コスモ出身者もある。古文講師の横井希灯さん(31)は高校を中退し、2004・06年にコスモに在籍。初めは「元のレール」に戻ろうと有

めざすのは大学受験だけじゃない。高校中退者の受け皿となつて30年。河合塾COSMOを舞台に、進路などに悩む子どもたちの姿を全8回で紹介します。

ゼミ活動 本の外の世界に気づく

いま No.1403
子どもたちは
学校じゃないから ②

もう二度と 袖を通さぬ
制服が タンスの奥から 私
を見る

名古屋市にある河合塾コス
モの校舎入り口にある「今月
の短歌」だ。作者の男性(25)
の歌が毎月飾られる。

男性は「じとつとしている
でしょう」と話す。引きこも

り歴8年。16、23歳のほとん
どを自宅で過ごした。「大人
とは自立した存在。だけど何
から自立すればいいのかわか
らない」。今月には26歳にな
る。だが「まだ、大人ではな
い」という。

高校1年の夏から不登校に
なった。母親からは「自宅で
ゲームばかりしていた」と言
われるが、そのころのことは
あまり覚えていない。「この
ままではいけない」。ずっと
思い続けていたが、次の一步
を踏み出せなかった。

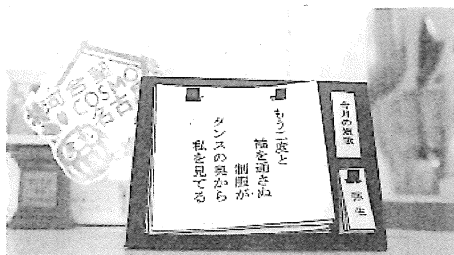
自宅では哲学書や物理、数
学の本を読みあさった。「哲
学の本を読みあさった。」「哲
学の本を読みあさった。」「哲

学と数学は理屈で真理を探究
するから似ています」。詩や
短歌を作ることもあった。

コスモに入ったのは201
6年4月。「入試に向けた勉
強と、苦手のコミュニケーション
のリハビリをした」と

考えたことがきっかけだ。員
が好んで、仲間や講師からは
「カイさん」と呼ばれてい
る。生命について学ぶ「バイ
オサイエンス」ゼミの活動と
して、愛知県美浜町の磯場で

生き物観察をした。そのとき
見つけたイシタタミという貝
のことが印象に残っている。
男性は図鑑で、この貝が足



早にはうことは知っていた。
でも、実際に動く姿を見るの
は初めて。窓際に入れておい
たらよい登って逃げてしまっ
た。「こんなに素早く動く

受付に置かれている「カイさん」
が作った短歌。吉本美奈子撮影

は思っていたなかった」。自宅
でいくつ本を読んでも気
づけないことがある。ささい
なことかもしれないが、男性
にとっては大きな出来事だっ
た。

「教科書の外にある世界を
知り、自分の経験や知識の外
にも広大な世界が広がってい
るのだと予感する」。口べた
だからと、パソコンで書いた
文章を取材時に記者に手渡し
て、伝えてくれた。価値観や
生き方など、「自分のカタ
チ」が定まったときが自立だ
と、今はそう思っている。

(増田男介)

学校じゃないから **3**

〔増田勇介〕

敷かれたレール降り 自ら受験

いま
子どもたちは

No.1405

学校じゃないから ④

「シンガポールでの勉強漬けの生活から逃げてきた」。河合塾 COSMO に2016年4月から通う名古屋市の矢沢美咲さん(18)は、そう話す。

父はタイ人で母は日本人。タイで生まれた矢沢さんは二つの国籍を持つ。中学までタイの日本人学校で学び、両親の勧めで15年にシンガポールにある日本の私立大系属校の高校に入學。親元を離れ、寮生活を始めた。

高校3年間の成績によって大學に内部進学ができるかが決まるため、常に勉強に追われる日々だった。平日は7時まで授業、夜は自習で就寝するのは日本に行くことになった。

父が愛するところ。同級生の部屋の明かりが夜明け前にもものを見ては、「早起きして、もっと勉強しなきゃ」と焦った。そんな生活が1年ほど続いたころ、家庭の事情で母親が帰国することになった。「疲れ切っていた」矢沢さんは、一緒に日本に行くことにした。

ただ、日本の高校に通うのは抵抗感があった。タイの日本人学校時代、転校生から日本の学校について、「意見が違っても



合わせないといけない」「トイしや教室の移動もみんな一緒」などと聞いていたからだ。

百人一首を楽しむ矢沢美咲さん
(右) 名古屋市南区

母が勧めたくれたコスモは、自由そうで気に入った。「勉強漬けの日々から解放される」という気がした。1月には、コスモのイベントで百人一首の大会に読み手として参加。「恋すてふわが名はまだき……」。タイで小中学校時代、競技カルタに熱中した。同じ百人一首について、コスモの古文の授業では歌の意味や時代背景を学んだ。「直接意味を伝えるのではなく、読み手に委ねる奥ゆかしさ

があることを知りました」

シンガポールの同級生たちは今春、大學に進む。矢沢さんは、コスモに入ってから高校卒業認定試験に合格。今年、愛知県内の大學を受験したが、願いはかなわなかった。もう1年コスモで学び、大學をめざす。

シンガポールで勉強に明け暮れていたころは、「敷かれたレールで、一生懸命やる自分に酔っていた」。今は、自分自身で道を選んでいくという実感があふれる。「回り道だけど、無駄ではないかな」。そう思っている。

(増田勇介)

いま 子どもたちは 学校じゃないから ⑤

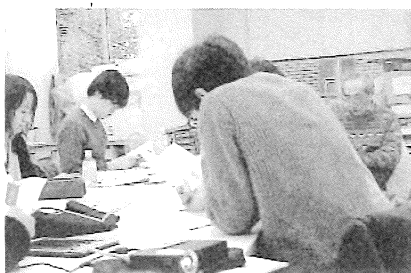
No.1406

ぶつ切りの知識、つながった

「高校の成績は良くなかったけど、授業は物足りなかった」。そう話すのは、名古屋市中島瑞穂さん(18)。2016年9月から、大手予備校河合塾の高校

中退者向けコース「COSMO」に通う。高校時代、教科はそれぞれどこかで関連しているはずなのに、受験勉強では、ぶつ切りで教えられていると感じて不満だった。

高校1年で中退し、コスモに入るまでは新潟市で過ごした。中学にはほとんど通わなかったが、大学に進もうと思つて公立の進学校に入学した。ただ、学校のテストで思うように点が取れなかったことや、自宅から高校まで遠いこともあつて、だんだん学校に行くのが嫌になつた。そのうち、通学するたびに「予備校に行つて大学に入れば」と母に勧められた。コスモには受験と直接関係ないゼミがあることを知り、興味が湧いた。祖父母の家から通う名古屋校では、1年かけて1冊の本を読み込む読書のゼミに入つた。今は、「知の巨人」と呼ばれ



読書ゼミで「羊の歌」を読み込む中島瑞穂さん(手前)と名古屋市中村区

た評論家の故・加藤周一さんの自伝「羊の歌」が題材だ。講師の斎藤雅久さん(71)が音読しながら、文章に出てくる単語を細かく解説する。

戦前の政治経済や、物理や数学の話……中島さんは「いろんな知識がつながつて、当時の世界が鮮明に浮かび上がる」と話す。高校時代に求めていたのは、そんな感覚だったという。

お気に入りの楽曲をプレゼンし合うイベントも、中島さんの好奇心を刺激した。昨年12月には、ロック調の「コスベル」、1980年代のテクノ、宝塚歌劇団。中島さんの知らない音楽が次々と紹介された。「趣味がまったく違う人たちが接するのって楽しい」

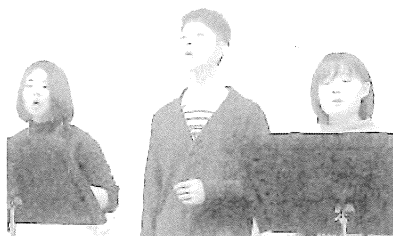
高校では十分に得られなかった満足感と楽しさを手にして、いつの間にか、受験勉強にも身が入るようになった。大学では、宇宙で生命の起源を探す「アストロバイオロジー」という学問を学ぶつもりだ。

今度はどんなつながりを見つけれられるか、中島さんは楽しみにしている。

(増田勇介)

合唱で声出すと気持ち晴れた

いま No.1407
子どもたちは
学校じゃないから ⑥



名古屋市の松岡草太さん(19)は高校1年から2年にかけて、10カ月ほど自宅に引きこもった経験がある。

2014年に愛知県の私立高校に入学。正義感が強く、クラスの代表として、先生たちとよく衝突した。茶色っぽい髪の毛が、黒く染めるよ

うに指導されたときもそうだった。松岡さんは「校則がおかしい」と訴えた。ピアス禁止や

合唱ゼミの仲間と歌う松岡草太さん(中央)。卒業を意識した曲を歌った11月、名古屋市市中村区

スカートの長さといった決まりも、「校則がある理由がわからない」。

だがその度に、職員室で担任に囲まれて、「学生だからダメなんだ」と一蹴された。理不尽さに腹がたつたが、当時の松岡さんには、大人たちにそれ以上の反論はできなかった。

追い打ちをかけたのが、同級生からのいじめだった。今なら「他人の言うことを聞か

ず、かたくなだったかな」と考えられる余裕もある。でも、当時は何がなんだかわからなかった。1年生の1月、学校に行けなくなった。3連休が明けたときだったと記憶している。

その年の秋、親に勧められた河合塾コスモの体験授業に参加した。何にひかれたのかはつきりしないけれど、職員に「来週も来てね」と言われたことは覚えている。

コスモでは合唱のゼミに入った。引きこもっていたときに、歌えたらいいな、と思っていた曲があった。人気アーティストの「僕が死のうと思つたのは」。歌詞が自分の気持ちにぴったりだと思つたか

らた。合唱で声出すと、不思議と気持ちが晴れて、この歌を口ずさむことができるようになった。ゼミで大切な友達もできた。

昨年10月から最近まで、大学受験の勉強のため、自宅にこもった。4月からは鹿児島県の大学で学ぶ。将来は先生になりたいと考えている。「生徒の個性を大切に、居場所をつくりたい」

引きこもり経験者は、昔の友達に会うと、「高校、やめちゃったの」と聞かれることがあるのだという。以前なら返答に困ったという松岡さん。今ならこう返せる。「お前、まだ学校行ってるの?」

(増田勇介)

「普通じゃなくていい」今度こそ

いま No.1408
子どもたちは
学校じゃないから ⑦

「普通だけじゃめざさない方がいいです」

高校を中退し、引きこもり経験がある愛知県一宮市の会社員女性(32)が、河合塾COSMOに子

どもを連れてきている親たちの前で語った。今年2月、出身者が体験を語る講演会でのことだ。女性も10代の3年半をCOSMOで過ごした。

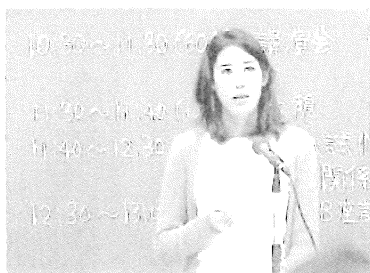
女性は勉強する意味がわからず、望まないまま高校に進んだ。高校生活は2カ月しか続かなかった。親に促されてCOSMOで学び、旧大検に合格後、京都の私立大学に進学した。

「会社では普通になろう」。卒業後は大阪市のシステム開発

会社で就職し、女性は決意した。振り返ると、「高校に通えなかった自分に不安とコンプレックスがあった」。

同僚が残業すれば、自分も深夜まで残業。同僚の7割が着ているような服を選び、昼休みには一緒に歯磨きをした。違和感を持ちながらも、「それが普通だ」と思った。

会社員3年目で、心がパンクした。めざしていた「普通」が何なのかわからなくなり、誰



COSMOに子どもを連れてくる親たちに語る女性 名古屋市中村区、河合塾提供

と思ったことは覚えてる。

自信を失って、周囲と連絡を絶つ日々。なんとなく進学してしまった高校に行けなくなったときの状況と似ていた。

ある日、通っていたCOSMOに立ち寄った。講師に話を聞いてもらい、ゼミにも参加しているうちに思い出した。「普通じゃなくてもいい」。ここで学んだときに、そう気づいていたはずだった。女性は大学院で学び直

し、再び働き始めた。今度は無理をせず、自分に合った生き方をしようと思っている。

女性の講演を聞いていた人たちの中に、COSMOに通って2年になる男性も交じっていた。16歳から23歳まで自宅引きこもっていた。かつての女性が求めた「普通」が、男性にとっては理想の自分だった。あこがれる一方で、苦しまれていたという。女性の講演を聞き終わり、「大切なのは個性も欠点も認められる自分」。そう考えられるようになった。

(増田勇介)

自分は何者？もう気にしない

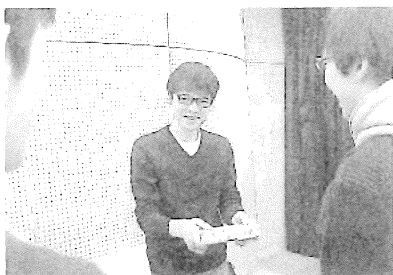
いま No.1409
子どもたちは
学校じゃないから ⑧

「心をえぐられる」「内定と合格って同じだね」。愛知県知多市の男性(19)は13日、通っている河合塾コスモで朝井リョウ原作の映画「何者」を見た。

春から大学に進む男性を送り出すと、コスモの仲間が「一緒にカタルシス(精神の浄化)を味わおう」と企画した。作品のテーマは就職活動。表向きは励まし合うものの、ねたみや虚栄心が見え隠れする学生が、自分は何者なのかを模索する。男性はコスモに通う電車内で原作を4回読んだ。「周りの目ばかりを気にする主人公が昔の自分にそっくりです」。

愛知県の県立高校時代は、生徒の序列を示す「スクールカー」で自分の位置が気になった。「より上をめざして、明るく振る舞いおしゃべりに気をつかった」。立場が「上」と思う友人と話すときは会話の主導権を渡し、「下」と話するとき少し見下していたという。

何のために勉強するかかわからず、先生に反発。関係が悪くなり、2年生の秋から学校を休みがちになった。自分のイメージが崩れたと不安になり、学校に



まったく通えなくなりました。高校をやめて、父親の友人から紹介されたコスモに2016

映画「何者」を鑑賞した後、万華鏡をプレゼントされて喜ぶ男性(中央) 名古屋市東区

年6月から通うことになった。だが、ここにも「序列」があると思い、しばらくはだれとも付き合えなかった。

授業後はすぐに帰宅したが、コスモに通う人たちがおしゃべりをする2階の「自由広場」は気になっていた。「なんか楽しそう」。1年近くたったころ、思い切って輪に入った。

日本史にやたら詳しい理系の人が、将棋を指す人、パレエが好

きな人、いろんな人がいた。「知識や経験があつて、器が深い人ほど面白い」。そう思うようになった。

4月から、神奈川県の大津市で法律を学ぶ。今は、コスモの担任の「フェロー」から労働法の本を3冊借りて読んでいます。「自分が何者かは分からない。でも、自分の中に物差しがあればいいと思う」。周りの人の目をばかり気にしていたあのころから、卒業する。(増田勇介)

◆「学校じゃないから」はこれで終わり、次回は4月上旬に始めます。